

# 学校教育と就業システムから進路指導を考える －映画「男はつらいよ」に描かれた場面から－

鈴木 隆 司<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>千葉大学・教育学部

## About Carrier Development Guidance for the relationship between School Education and Employment － From the Scene of the Movie "OTOKOHA TSURAIYO" －

SUZUKI Takashi

Faculty of Education, Chiba University

本研究は、学校と就業の関係について、日本の職業教育システムを諸外国のそれと比較することにより、日本の進路指導の問題点を明らかにし、今後の進路指導に対しての提言をなすものである。そのため、社会の様子を反映させている映画作品「男はつらいよ」における台詞を分析することにより、問題点を浮き彫りにしてそれを職業教育と就業システムとの関係において考察した。結果、日本の中等教育においては、職業教育の内容よりもエンプロイアビリティ (employability) の形成が重視されることから「いわれのない差別」が生じやすい仕組みになっていることを見出した。その上で、職業教育の内容と結びついた進路指導の充実を図ることを提言した。

キーワード：進路指導 (career guidance), 映画 (movie), 職業教育 (vocational education), 就職 (employment), 汎用的能力 (general ability)

### 1. 学校における進路指導の問題

近代になって制度としての学校教育が生まれて以来、上級学校への進学は人々の関心を集めてきた。日本では、戦前までは学校制度が複線型であり、上級学校への進学は一部の富裕な層を中心とした、いわばエリートのものであった。戦後、教育制度は単線型となり、社会が豊かになって、より多くの人々が上級学校に進学するようになっていった。平成29年度に文部科学省が行った学校基本調査によれば、現在では中学校を卒業して高等学校へ進学する者は97%近くに達している。また、高等学校を卒業して上級学校へ進学する比率 (進学率) は年々上昇しつつある。中でも、大学・短大に進学する者は普通科で63.9%、専門学科で21.3%となっている<sup>1)</sup>。

こうした状況の中で、中・高等学校で行われる進路指導の多くは、将来の生活や職業に向けての進路指導といった色彩よりも、上級学校への進学を対象とする「進学指導」といった側面が色濃くなってきている。本来、進路指導は、生徒が学校を卒業する際にどの学校へ進学するか、または合格できる学校はどこかを予測・判断して、進学先を定めることだけではない。学校で行う進路指導においては、生徒自身が、何の価値において自分の人生の方向を見出し、どの職種・分野を選ぶのかといった自身の将来のキャリアを見通せるようにした上で、進学先の学校で学ぶ分野や学びたい内容を考慮して、どういった進路を選ばせるのかといった問題について、生徒や親とともに考える必要があるだろう。すなわち、進路

指導は職業指導を含む個々の生徒の進路について考え、個に応じた進路の決定に関する相談並びに適切な指導を行うものである。進路指導の内容や方法は、生徒の個別的な興味・関心、特性や適性、家庭の事情などによって大きく異なるため、生徒ひとりひとりの状況に応じた適切な指導が必要になる。

このように、進路指導の実際には、現実と理想が乖離する部分があり、複雑な諸相を呈していると言える。そのため、モデル化した典型的な事例を描き出し、その事例を基に一般化して考えることは難しい。

進路指導は、複雑かつ個別的な問題ではあるが、誰もが人生で一度は出会う身近な問題である。そうした問題については、物語として表現されることがある。物語を描き出す方法としては、文字や映像等が用いられてきた。文字と言え、文学 (小説や自伝、エッセイなど) がそれであり、映像であれば映画がそれに該当する。中でも、多くの情報をまとめて描き出すことができるのが映画である。実際に、これまで多くの映画が、人の生き様を描き出してきた。その中には、学校における進路指導を考える上で参考となる映画があるのではないだろうか。

### 2. 映画「男はつらいよ」シリーズと進路指導の問題

山田洋次が原作・監督を勤め、制作された (一部作品を除く) 映画「男はつらいよ」シリーズは、人々の人情を描き出した喜劇である。松竹によって、1969年から1995年までシリーズ全48作、そして1997年に特別編1本が公開された。さらに、2018年9月6日に映画「男はつらいよ」50周年プロジェクトとして、新作映画の製作が

連絡先著者：鈴木隆司 t-suzuki@faculty.chiba-u.jp

決定したことが伝えられた。映画「男はつらいよ」シリーズの観客動員数は総計79,581,000人と日本映画界に足跡を残す空前のロングラン作品となった。映画としてのヒットのみならず、映画「男はつらいよ」シリーズは、それを対象とした社会学的・社会心理学的な研究も行われてきた。しかし、その数は多いとは言えない。そこで、映画「男はつらいよ」シリーズを進路指導研究の対象とする可能性について考えてみよう。

加藤ゆうこは、これまで映画「男はつらいよ」シリーズが研究対象として取りあげられることが少なかった理由について述べながら、その研究の可能性について次のように述べている。「分析対象が映画作品であると、あくまでもフィクションであることが挙げられる。つまり、時代を描いた記録作品ではなく、喜劇として創作された作品であるということである。ただし、作品に現れる風景や日常的な台詞、ヒットした年代などを通して作品と社会を関連付け、その社会的な意義や影響を語ることは多々ある。」としている<sup>2)</sup>。加藤によれば、映画「男はつらいよ」を研究の対象とすることに対する弱点が、映画として制作された物語の虚構性（フィクション）にあるとしつつも、映像として描き出された風景や日常的な台詞などを対象としてとりあげ、それを分析することにより、社会的な意義・影響といった社会との関連について語るといった視点を持つことができることが示唆されている。このように、研究の対象を風景や台詞に限定することにより、映画「男はつらいよ」はその社会的意義や影響について、研究対象として「可能性に満ちた研究素材」であると言えるだろう。では、そうした点から見て、映画「男はつらいよ」は、進路指導といった教育問題に答えることができるのだろうか。

映画「男はつらいよ」では、主人公でテキ屋を生業とする「フーテンの寅」こと車寅次郎が繰り広げる大騒動を中心に物語が描かれている。そこで描かれる内容は、人々の日常生活の中で生じごく普通の出来事が扱われている。その出来事のうちのいくつかは、学校をテーマとした作品がある。その作品の中で、学校の価値観と対峙して浮き彫りにされているのが寅次郎の価値観である。このことについて、竹原弘は寅次郎の価値観と寅次郎の妹のさくらたちのような典型的な「常識派庶民」がもつ価値観との対比から、映画「男はつらいよ」の特徴を示している。竹原は次のように述べている。「寅次郎がさくら達のように物質的豊かさを追い求めるレースに乗れなかったかも知れないが、彼の価値観は明らかにさくら達とは違う。もちろん、寅次郎も、先に述べた様に、そうした生活に対する憧れは持っているが、それをさくら達のように追求しようとはしない。彼自身の中に、そうした物を求めることへの諦めの様なものがあったのかもしれないが、とにかく寅次郎はそうした競争社会から一歩身を引いている。」<sup>3)</sup>

映画「男はつらいよ」に描かれた出来事は、上記のような価値観を持った主人公・車寅次郎が語る台詞によって表現されている。すなわち、寅次郎の台詞に、「常識派庶民」とは違った価値観から見た現実に関わり得る問題への応えが表現されているのである。ここに映画「男はつらいよ」が空前のロングランを達成し、多くの人々

から受け入れられてきた特徴があると竹原は分析している。そうした映画「男はつらいよ」に描き出された諸問題のひとつに学校の問題がある。しかも、映画「男はつらいよ」では、学校教育の問題が、学校の中で語られるのではなく、社会との接点、すなわち、進学・就職といった出来事との関連から語られている場面が多い。通常の学校教育と異なった道を歩んだ主人公・寅次郎の価値観から見た学校における進路指導の問題が、寅次郎の台詞を通して語られているのである。そこには、現代の学校と社会をつなぐ進学・就職に関する問題、すなわち進路指導の問題が描き出されていると言っているであろう。寅次郎の台詞には、人がその生き方を考えるにあたって大切であるのだが、これまでの進路指導の理論や実践では十分に扱うことができなかった問題と応えが、寅次郎の価値観から描き出されている。とりわけ、寅次郎の応えは、寅次郎が生きてきた世界観・価値観が基調とされ、反映されているため常識とはかけ離れているものがある。しかし、寅次郎の応えとなる台詞には、映画を見る人の笑いや哀愁を誘い、胸を打つものがある。

こうした映画「男はつらいよ」の主人公・寅次郎の台詞は、教育に限らず、人の生き方全般にわたり、様々な側面から「名言集」としてまとめられていることから定評があることがわかる<sup>4)</sup>。

映画「男はつらいよ」の主人公・車寅次郎の台詞には、一人語りが多い。映画「男はつらいよ」の主人公・車寅次郎役の俳優・渥美清の独特の語り口で演じられる語りは「寅の Aria」とも呼ばれ、その名調子が賞賛されている<sup>4)</sup>。

### 3. 研究の方法

これら先行研究の成果から、映画「男はつらいよ」の主人公・車寅次郎の台詞から、学校教育と社会との接点として進路指導の問題について考察することは、これまでにない独自の視点を描き出すことができると考えられる。そこで、本論では、映画「男はつらいよ」で語られた寅次郎の台詞を分析対象として、現代の学校における進路指導の問題として、とりわけ社会との接点について考えなければならないことを描き出し、その解決に向けての考え方を抽出することとした。

はじめに、寅次郎の台詞の中から進路指導に関わる代表的なシーンを選び出した。次にそのシーンの台詞をテキストとして記述し、そこで描き出された進路指導をめぐる問題点について、学校と就労をつなぐシステム論から検討することにした。とりわけ、諸外国における学校教育と就労の関係についてのシステムの特徴を示すことによって検討する。その上で日本における進路指導の問題点に対して、寅次郎の台詞に描かれた応答が示すもの見方・考え方について検討する。

#### 4. 第40作「寅次郎サラダ記念日」にあらわれた満男の大学進学相談

##### 4-1. 何のために勉強するのか

「男はつらいよシリーズ」第26作「寅次郎かもめ歌」



の中で、主人公・車寅次郎は定時制高校の生徒に、自身が中学生の時学校で騒動を起こして退学になったことを語っているシーンがある。その後、寅次郎は同定時制校に願書を提出した。ところが、彼は中学校中退の学歴しかないため高等学校の受験資格そのものがない。そこで定時制高等学校の教師が、寅次郎の進学について妹のさくらに検定試験を受けるか夜間中学校に通うことを勧めるシーンがある。また「男はつらいよ」シリーズ第35作「寅次郎恋愛塾」では、葛飾商業高校同窓会から来たハガキに対して「卒業してねえのに何で会費払わなくちゃなんねえんだ」と言う台詞がある。この時には寅次郎の学歴は高校中退として描かれている。このように寅次郎自身の学歴についてはシリーズの中での統一性に欠け、不透明ではあるものの、「16才で家出して、その後放浪の生活をしてきた」という設定だけは統一されている。いずれにせよ、上級学校への進学と縁がなかった寅次郎が甥の満男から大学進学について相談されるシーンが「男はつらいよ」第40作「寅次郎サラダ記念日」にある。学歴がない寅次郎に大学進学について相談するという滑稽さがあるものの、寅次郎の対応には学識や経験によらない考え方が語られている。その台詞に通常の進路指導にはない特徴的な応答が示されている。そのシーンの台詞は図1のようになっている。

荒川の川縁で寅次郎と満男が寝そべっている。河川敷ではサッカーをしている、お昼休みのサイレンがバックに流れている。

満男：「おじさん、質問してもいいか？」

寅次郎：「あんまり、難しいことは聞くなよ」

満男：「大学へ行くのは何のためかな？」

寅次郎：「決まってるでしょう。これは勉強するためです。」

満男：「じゃあ、何のために勉強するのか？」

寅次郎：「チェツと舌打ちして、草をちぎって満男に軽く投げつけながら、

「そういう難しいことはきくなっていったら、俺に」と言いながら、起き上がり真面目な顔つきになる。カメラワークは正面からの撮影に変わる。

寅次郎：「つまりー、あれだよ。ほら、人間長い間生きてりゃ、いろんな事につかるだろ。な。そんな時俺みたいに勉強してないやつは、この一、ふったサイコロで出た目で決めるとか、その時の気分で決めるよりしょうがないんだ。な。」

シーンが寅次郎のアップになる。

「ところが、勉強したやつは違う。自分の頭できちんと筋道を立てて、はて、こういう時はどうしたらいいかなと考えることができるんだ。だからみんな大学いくんじゃないか。そうだろ？」

再び横になり

「久しぶりにきちんとしたこと考えたら、頭痛くなっちゃった。」

また、カメラは背後から二人を写し出し、このシーンは終わる。

図1. 寅次郎が甥の満男から大学進学について相談されるシーン  
男はつらいよ第40作「寅次郎サラダ記念日」より書き起こし

この台詞で寅次郎は、大学進学を「学問を学ぶ」や「職業に必要な高度な知識や技能を習得する」といったこれまで常識とされてきた大学で学ぶことの意義を語ってはいない。寅次郎が語っているのは、ごく当然のこととして受けとめられる「筋道立てて考える」ということにすぎない。「筋道立てて考える」ためには、しっかりとした方法を習得して、論理的で明快に考えを進めていく必要がある。そうした方法は、大学において、学問的・専門的知識や技能を身につけていくことによって養われる。そのことが、言外に含まれているということを視聴者に想定させる台詞となっている。それだけではなく、寅次郎が語っている台詞には、大学で学んだその先のことが示されている。寅次郎が語っている台詞には、「大学で何を学ぶか」という教育内容だけではなく、「何のために大学で学ぶのか」という意図、すなわち教育目的が含まれている。それは、「自分の頭できちんと筋道を立てて」という台詞に現れている考える人の主体性と論理性である。大学で学ぶということは、自らが自身の判断により、考えることができる自由と信念の獲得が目的であることが語られているのである。

こうした大学で学ぶことの意義については、昨今ではディプロマーポリシーとして各大学・学部が公表している。

#### 4-2. 大学・学部のディプロマーポリシー

平成28年3月31日中央教育審議会大学分科会大学教育部会から「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマーポリシー）「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラムポリシー）「入学受け入れの方針」（アドミッションポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」（以下、「ガイドライン」とする。）が出され、大学・学部は「ガイドライン」に示されたディプロマーポリシー（卒業までに身につける能力）を中心とする3つのポリシーを公表することになった<sup>5)</sup>。

大学には知識や技能を授けるという機能がある。そのため講座や科目といった学びが教育課程として組織的に編成されている。大学が授けるべき知識や技能については、ディプロマーポリシーやカリキュラムポリシーによって示すことができる。もう一方で、多くの大学・学部は「倫理観」や「態度」といったように特定のカリキュラムだけでは十分に育むことができない内容をディプロマーポリシーに記載している。大学・学部は、一方で知識や技能といった測定可能な能力、他方でそれとは異なる総合的な「学修」の対象となる能力といった2つの異なる能力を授けることを3つのポリシーに記載するようになった。つまり、3つのポリシーに記載しているということは、大学で授けることができる能力には、2つの異なる能力が存在することを大学・学部が認めていることになるのである。

確かに、一方では大学には、講義や演習・実習といった知識や技能を授ける場が用意されている。だが、学生はそれだけに終始して大学で学んでいるわけではない。学生は学生生活を営む中でも、多くのことを学んでいる。学生生活の場面では、多くの人と出会い、人との関係を築き、研究すること以外にも、アルバイトで働くこと、課外活動やボランティアなどの自主的な活動、旅行や留学等の体験的な学びなど、あらゆる場でさまざまな対象

について触れることを通して、自身の生き方を考える上で必要な多くのことを学んでいる。そこで、高校生が大学や学部の選択を行う際には、大学案内に書かれているような大学が提供する内容を学ぶことと合わせて、学生生活を行う上で、誰と出会い、そこから何をどう学ぶかということも考えることが必要になってくる。文学部であれば、どこの大学でも同じ能力を身に付けることができるため、どこの大学を選択してもよいというわけにはいかないだろう。その大学に通う人々の有り様、教授陣の顔ぶれ、気風・校風、就職先や卒業生の活躍といった数値だけでは測定できない要因が進学先としてその大学を選択するかどうかの判断の対象となる。ところが、高校生が大学を選択する場合、こうした高校生自身の志望や大学が提供する学修の内容もさることながら、現実には、志望する大学に入学できるだけの学力があるかないかが問われることになる。現在の日本では、学力試験の成績、特に偏差値によって、入学試験への可否の可能性が判定され、その判定の下で受験する・しないを決めるシステムができて上がっている。多くの高校生は、自身のキャリアプランや適性もさることながら、現実にはこうした受験のシステムに取りこまれながら、自身の希望と成績を勘案しながら進学先の大学・学部を決めているのが現状ではないだろうか。

こうした現状を背景として、いま一度寅次郎の台詞について考えてみよう。寅次郎は満男の質問に対して、最初「大学は勉強するためにいくところだ」と言っている。大学は勉強するところであるというのが、大学の一つの機能であることは間違いのないだろう。(正確には無理にやらされるという意味が強い「勉強」ではなく、主体的に取り組む「学び」とするほうがふさわしいだろう。)寅次郎の考え方の特徴が表れているのはその後の台詞である。寅次郎は、満男がその応答に際して、さらにつっこんで問いかけた「何のために勉強するのか」に対して「筋道を立てて、物事を考えることができるようになるため」と応えている。実際に世の中に出れば、生きていく上で様々な問題に出会うことになる。そして、その問題の解決を迫られることになる。その際に、大切なことは偶然に頼ったり、風説に流されたりするのではなく、自分の頭で責任を持って「筋道を立てて考える」ことが必要だと寅次郎は語っている。この台詞には、寅次郎を反面教師として見た上での考え方が描かれている。寅次郎は、自らがそうであるように、大学で学んだことのない者は、何の根拠もなく偶然に頼って問題を解決するしかないとしている。この台詞の言外には、寅次郎自身がこれまでそうした判断をしてきたために苦労してきたことが髣髴とさせられている。普段、気楽に見えている寅次郎の生活には、実は厳しい現実さらされながらも、自分自身ではどうしようもないところにあるという切なさが描かれている。そうした貧しく切ない生活に陥らずに、自分自身の力でしっかりと生きていくために、大学で学ぶことがとても重要であることを寅次郎は語っている。そこには、寅次郎が行ったことがない大学に対する純粋で、憧れにも似た気持ちが語られていると言えるだろう。寅次郎の目から見れば、キャリアプランや適性とは異なる偏差値なるものによって志望大学を決めている

者がいるなどとは思ってもよらないことだろう。

#### 4-3. 「学士力」と社会や企業が求める能力

大学のディプロマポリシーを作成する上で、「ガイドライン」には「改善方策の例」として「学士力」が示されている。「学士力」は寅次郎の言う「筋道立てて考える」ために必要な能力となるのであろうか。「学士力」とは、「専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する専門的な知識・理解の他に、コミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力といった汎用的技能、並びに自己管理能力、チームワーク、リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力といった態度・志向性、そしてこれまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決するための統合的な学習経験と創造的思考力を指している」とされている<sup>6)</sup>。こうした「学士力」は「就職基礎能力」や「社会人基礎力」と比べてみるとその共通性と違いが見えてくる。中央教育審議会・キャリア教育・職業教育特別部会(第7回)において配付された資料「基礎的・汎用的能力の明確化と、その育成について」において次ページのような表が示された。これによれば、「就職基礎能力」とは、コミュニケーション能力、職業人意識、基礎学力、資格取得を要素とした能力であり、「社会人基礎力」とは、前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング)、チームで働く力(チームワーク)であるとされている。

これら、大学と社会・企業が共通して要求する能力は、学問的・専門的な知識・技能よりも、人や社会との関わりを円滑に進めるための汎用的な能力が重視されていることがわかる。

#### 4-4. 「学士力」と「社会人基礎力」並びに「就職基礎能力」の相違と関連

この表を見ると学問的・専門的な知識・理解だけが、「就職基礎力」及び「社会人基礎力」とは異なり「学士力」にしかない項目であることがわかる。さらに、学問的・専門的な能力と汎用的な能力の関係については示されていない。この点は注目に値する。こうした能力観について、現実の学生の学びを基に考えてみよう。

学生は大学に入ってから学問的・専門的な能力を身につけるべく講義や演習、実験に参画することを求められる。その一方で、就職に必要な能力、すなわち採用側が求める汎用的能力を身につけ、就職先を見出すことにも勤しむという二重の学びに巻き込まれてしまう。あまつさえ、学生は、大学において単位を取得することを一方で睨みつつも、より現実的である就職(就社)に目を奪われがちになっていく。そのため、中には大学での単位取得はそこそこにしておき、就職活動(「シューカツ」と呼ばれる。)に励む者が現れるようになる<sup>7)</sup>。では、どうして、社会人になることや就職するにあたっては、寅次郎が考えているように大学で「筋道立てて考える」ための学問的・専門的な知識・技能といった能力が重要視されず、汎用的能力を身につけることが要求されるのであろうか。一体、何がこのような事態を引き起こしてしまっ



表 1. 4領域・8能力と学士力等の対比案 (資料)

| 4領域・8能力(初等中等教育) |   | 学士力(高等教育・学士課程教育)   | 委員の主なご意見   |
|-----------------|---|--|--|
| 人間関係形成能力        | 【 <b>自他の理解能力</b> 】<br>自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切に行動していく能力                    |  | ○社会との関わりを踏まえた自己実現                                |
|                 | 【 <b>コミュニケーション能力</b> 】<br>多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力        | ○コミュニケーション・スキル(日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる)<br>○チームワーク、リーダーシップ(他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる)   | ○コミュニケーション能力(特に聞く力)<br>○仲良くする能力(協調性)             |
| 情報活用能力          | 【 <b>情報収集・探索能力</b> 】<br>進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力  | ○情報リテラシー(ICTを用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる)  | ○労働市場知識  |
|                 | 【 <b>職業理解能力</b> 】<br>様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力         | ○倫理観(自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる)   | ○労務観、職業観<br>○職業倫理                                |
| 将来設計能力          | 【 <b>役割認識・認識能力</b> 】<br>生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力       | ○市民としての社会的責任(社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる)   | ○社会力(社会をつくる力、共に生きる力)                             |
|                 | 【 <b>計画実行能力</b> 】<br>目標とすべき将来の生き方・進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力         | ○生涯学習力(卒業後も自律・自立して学習できる)   | ○自ら目標を立て、行動する力<br>○段取りを組んで取り組む力<br>○生涯を通じたキャリア形成 |
| 意思決定能力          | 【 <b>選択能力</b> 】<br>様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力       | ○自己管理能力(自らを律して行動できる)   | ○粘り強さ、我慢(継続)<br>○前に踏み出す力、主体性                     |
|                 | 【 <b>課題解決能力</b> 】<br>意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力 | ○問題解決力(問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる)<br>○論理的思考力(情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる)<br>○数量的スキル(自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる)<br>○統合的な学習経験と創造的思考力(これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力) | ○自ら課題を発見し、解決を図る力<br>○変化や未知の問題への対応力<br>○論理的な思考力   |
|                 |   | ○知識・理解(専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する)  |  |

たのだろうか。この問いを考えるために、日本の学校教育において、教育と就労システムがどのようなつながりをもっているのかといったことを教育のシステムから検討してみる必要がある。

### 5. 諸外国の職業教育と就労とのつながりと日本の場合

世界の国々の教育を総括的に解説している「教育学研究事典」(Encyclopedia of Educational Reserch)によれば、日本の職業教育の制度は、諸外国の職業教育と大きく異なっているといった評価がされていることがわかる<sup>8)</sup>。とりわけ、「教育学研究事典」では、職業教育の内容を誰が決定しているのかということについて、イニシアチブをとっている組織なり立場が、それぞれの国でどうなっているかという点から区別して記載されている。以下、「教育学研究事典」を基に諸外国と日本の職業教育システムの違いについて検討する。本論では、職業教育並びに訓練、国際比較(Vocational Education, International Differences)に描かれた職業教育の分類を示した図を基に検討していきたい。

第一は、職業-技術中等学校システムである。「教育学研究事典」によれば、これはフランス型システムとされている。この制度では中等教育学校で教授する職業教育の内容を学校が中心となって組織しており、その内容は資格制度と結びつけられていることに特徴がある。中等教育段階に、職業教育を受けることができる職業-技術学校が編成されているところに制度上の特徴がある。こうした特徴を持った制度の下、中等教育の後期課

程には、職業・技術教育を行う職業リセ(2~4年制)と技術教育を含む普通教育を行うリセ(3年制)がある。職業リセでは、主に就職希望者を対象に職業資格の取得を目的とする教育が行われ、課程修了時に受ける国家試験に合格すれば、「職業適格証(CAP)」と「職業教育免状(BEP)」を取得することができる。職業バカロレアの取得を目指す場合は、さらに2年制の課程に進学するという道がある。1980年代から若者の高い失業率が慢性的に続く中、フランスでは「職業教育の強化」が教育政策の重要な柱となり、若者の就職を促進するために産学連携が推し進められた。この産学連携においては中等教育の後期課程における「交互教育(alternance)」の充実が図られた。「交互教育」では、学校での教育と職場での訓練を交互に行うことにより、実際の現場で必要な能力を身につけさせ、若年者の能力の向上と就職を促進することがねらいとされた。フランスでは、労働協約や企業協定を通じて、資格取得者に一定の水準の賃金が保障されている。そのため、学校システムに応じて段階的な資格のシステムが整備されている(図2)。

第二は、アメリカの学校教育で行われているように、中等教育で行われる職業教育の内容を、その職業に関する協会が中心となって決定するというものがある。この方式では、協会が認定する教育内容であるため、職業能力として一定の水準を保つことができる。加えて職業に対する知識や技能に標準をつくりだすことができる。アメリカでは、中等教育学校は総合的(Comprehensive)な性格を持つ。そのため、一定の職業教育的な内容も身に付けることが必須とされている。アメリカでは、後期中等教育から職場への橋渡しを円滑にするためのシステ

ムづくりを推し進めている。そのひとつとして、主に後期中等教育学校在学中から学校と職場での技能訓練を組み合わせる実施し、即戦力としての知識と技能を持たせることができるように制度的な整備が進められている。また就業対策のひとつとして、後期中等教育学校中退者を対象とする職業資格所得のための支援プログラムも用意されている(図3)。

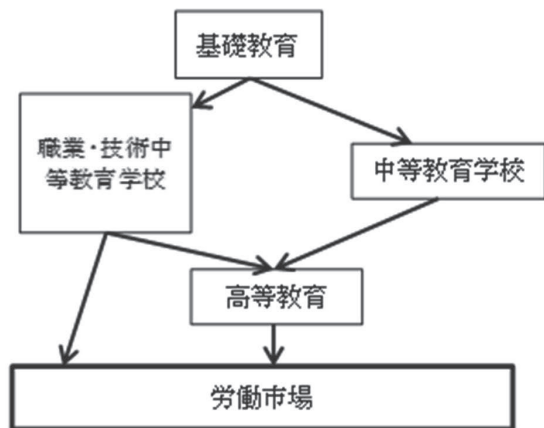


図2. 中等職業・技術学校制度

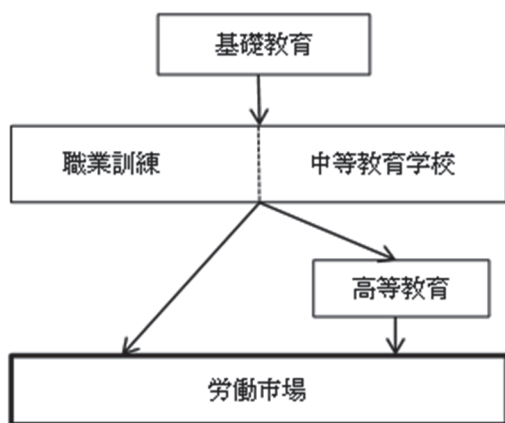


図3. 総合制職業学校制度

第三は、ドイツのように職業教育的な内容は学校教育と職場との両方で学ぶというシステムである。この方式は、学校と職場の双方で学ぶことから「デュアルシステム」と呼ばれている。「デュアルシステム」は、基礎教育終了後、就職希望者は、職業学校に通いながら、企業内で職業訓練を受けるといった二元的なシステムである。職業学校では各州の教育省が発行する学習指導要領に沿ったカリキュラムが編成されている。生徒は職業学校に通いながら同時に企業において訓練ポストを得ている訓練生にもなっている。「デュアルシステム」と呼ばれるこの方法では、基本的には理論は学校で、実習は職場でと学習形態に応じて、学びの場を棲み分けて教授されることが多い。訓練を終えると、生徒は商工会議所や手工業会議所等の職能団体が実施する修了試験を受け、これに合格すると職業資格を得ることができるようになっている。この方法は、学校の学びと職場をつなぐ有効な

方法として評価されてきた。ところが、最近では、企業が提供できる職業訓練ポストの不足が深刻な問題となっている。「デュアルシステム」では訓練の実施が企業に委ねられており、訓練コストの負担が増大しているという問題点がある(図4)。

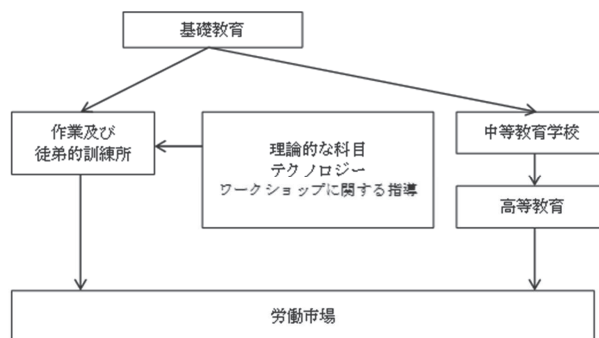


図4. デュアルシステム

第四は、ラテンアメリカ諸国で行われているように、職業教育は学校とは別に職業教育に関する機関を設置して、その機関(センター)で集約的に職業教育を行うというシステムである。多くの場合、学校外に職業訓練に関する機関(センター)が設けられており、そこで職業訓練が実施される。学校教育では職業訓練センターとは別の教育が行われる。そのため、学校教育と職業教育が平行して行われることになる。職業訓練については、職業訓練センターで全て可能である。この制度が有効に機能すれば、教育と訓練の関係が一定整理されて、就労への橋渡しを円滑に進めることができるだろう(図5)。

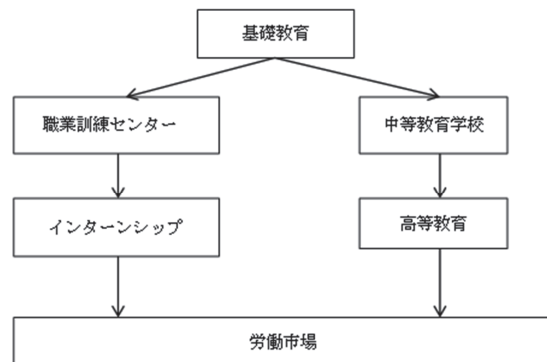


図5. 職業教育センター方式

職業教育機関(センター)という職業教育に責任を持つ機関(センター)が職業教育を実施するため、訓練内容の統一、設備の投資等を集中的に行うことができる。また、訓練後のインターンシップとの接続についても、円滑に実施することが可能である。これらの制度が有効に機能すれば、教育と訓練の関係が一定整理されて、就労への橋渡しを円滑に進めることができるだろう(図5)。「教育学研究事典」では、世界の多くの国がこの4つのシステムのいずれかに分類されるとしている。その上で、この4つにあてはまらない例外的なシステムを有する国として「企業内訓練：日本(Enterprise Training The Japanese System)」が紹介されている。日本は学校教育では特定の職業と直接つながる教育が行われていると



は言い難い。日本では、実際の職業につながる教育・訓練の多くは学校で行われているのではなく、現場での訓練、すなわち企業内教育に任されている。企業内教育は企業内学校や企業内の組織（人事部等）で行われる場合もある。OJTとして職場で働きながら直接行われることもある。こうした職業教育のシステムを採用した場合、各企業が、その職場に適した訓練内容を定めることになり、各企業任せとなる。そのため、学校で取得した知識や技能、また資格などがその企業が必要とする職務遂行能力と一致するとは必ずしも言えない。そのため、学校教育と就労との間に乖離が生じる可能性が大きい。このように日本では、就労して職業を遂行する上で必要な知識や技能の習得に学校が関与することが難しいシステムとなっているといえる。

では、日本においては、学校教育には何が期待されているのだろうか。日本の学校教育に期待されているものは、直接職業の遂行につながらないが、職業生活を営む上で必要となる、人と人との関係づくりや職業人意識、ビジネスマナーといった汎用的な能力であるエンプロイアビリティ（employability：雇用可能性）の育成ということになる。職業遂行に必要な知識や技能は、その企業の内部でその企業に適合したものを授けていくので、学校で具体的な職業に関する専門的な知識や技能を扱うことはあまり期待されていない状況が生み出されているのである。むしろ、学校ではその企業での職業遂行に直接必要とされない生半可な知識や技能なら身につけていないほうがよいとさえ考えられる傾向にある。出身学部や学科、専攻といった専門性と就労内容が必ずしも一致しないという日本の就労の現状は、学生が学校で自らの専門性を学ぶ意欲や目的を見失わせてしまうような状況をつくり出していると言えるのではないだろうか。

## 6. 学校教育の学びと職業教育の学びを統一的に考える

このように見てくると、満男の質問に対する寅次郎の回答は、企業における職務遂行に必要な専門的能力と汎用的で対応可能性が高い能力の双方に通じる共通点を述べていると考えられるのではないだろうか。つまり、寅次郎の台詞によって提起されている能力は、学校における専門的な学びとその人が生きる上で必要な学びを統一的に考えていく上で重要な視点として、主体性と論理性をとりあげているのではないだろうかと考えた。

競争社会に巻き込まれ、学ぶことの意味を見失いかけている満男に対して、寅次郎の助言は大学に入ってしっかり真実を見極めることができるような科学的認識を育ててほしいというメッセージを送っていると同時に、そうした科学的な認識を持って社会を見つめ直して、自信を持って生きていけるようになってほしいというメッセージを送っているのではないだろうか。

現代の学校における進路指導は、どこの大学に進学するかという問題を考える際に、その大学が提供するカリキュラムや就職率といった機能面と同時に、そこで学んだことをいかして自分自身がどのように生きていくことができるのかといった大学での学びの問題とつなげて考

えることが必要であろう。その際、大学で学ぶことができる学問や専門的な知識や技能とその人の生き方が切り離されて考えられたり、異なる文脈で考えられたりするのではなく、そのふたつをつなげて、関連させて考える視点を持つことの大切さを映画「男はつらいよ」から学ぶことができるのではないだろうか。

## 7. 進路の決定と入学試験

現在の日本の学校における進路指導の問題として、入学試験がある。現実には、入学試験にパスしなければ、希望する上級学校に行けない。そのため、子どもたちは入学試験のための勉強、すなわち受験勉強に勤しむことになる。しかし、受験勉強は必ずしも上手くいくものではない。そのため、多くの子どもは不安を抱えることになる。そうした不安を乗り越える精神的に強いモチベーションを保つことができなければ、希望する上級学校に進学することが出来ない。ましてや、一度学校での学びに失敗して、もう一度やりなおすシステムが確立されていない日本ではなおさらである。

ここで取り上げる男はつらいよシリーズ第26作「寅次郎かもめ歌」の1シーンはまさにそうした若者の姿を示している。経済的事情により高校を中退したため、もう一度高校での学びを取り戻したいという想いを抱いて、北海道から上京してきた娘「すみれ」は定時制高校の編入試験突破を目指して受験勉強に取り組んできた。そして、いよいよ受験当日となった。このシーンはまさにこれから受験会場である定時制高校に向かう橋の上での寅次郎とすみれの対話シーンである（図6）。

川にかかった橋の上に差し掛かった時、寅が先に立ち、すみれはその後を書類を抱えながらうつむき加減についてくる。徐々にすみれと寅の間に距離ができる。寅は振り向いて、

寅次郎：「どうしたんだい、いったい。試験受けるのが怖いのか」

寅次郎の表情が堅くなる。

すみれ：「寅さん、あたし、やめようかな」「だって、どうせだめだもん」

と言って、すみれは欄干から川を覗き込むようにしている。

寅次郎：チェツと舌打ちしてしょうがないなあというような目つきの表情になる。寅はすみれの背中に向かって話かける。

「今頃、そんなこといってどうすんだよ」「博だって、一生懸命勉強おせえてくれたんだろ」

すみれ：半分寅次郎の方へ振り向きながら、「わたしダメなの」「だって、中学2年の教科書もできないんだから」「どってことないもん。高校なんか出たって。」

そこを女子高校生らしい2人が自転車で話しながら通り過ぎる。

寅次郎：ぐっとすみれのほうに向きなおり、「すみれ」「おまえそれでいいのか」「本当にそれでいいのか」「あの娘の親父は大酒のみで博打好きだ。親父がろくでもなしだから、娘もぼんくらで、夜間の高校も入れやしない。おまえそうやって人に後ろ指さされて（こですみれのうでをつかみ、振り向かせる）平気か」

すみれ：寅次郎の方に向き直り、今にも泣きだしそうな表情で、首を横に振る。

寅次郎：「だろう」とすみれの肩に手をかける。そのまま促しながら連れて行く。

図6. すみれ不安のシーン 男はつらいよ第26作「寅次郎かもめ歌」より書き起こし

いざ受験を目前にして、すみれは不安になってしまう。その不安に寅次郎が応えている。すみれは自身が勉強ができないことを自覚している。実際にすみれは、受験勉強をすすめても「中学2年生の教科書もできない」でいる。あげくに「どってことないもん。高校なんか出たって。」とまで言いだしてしまう。これにはすみれのこれまでの日常が反映されているからだろう。すみれは高校を出ていなくても、生活することはできていた。そのようなすみれに、寅次郎は「おまえそれでいいのか」「本当にそれでいいのか」と、これまでの日常と決別して、新たな生活や学びに挑もうとする決意を思い起こさせている。

本来ならば、義務教育を修了していれば、一人前に働いて社会生活が営めるはずであろう。しかし、高度化した現代の社会では、中学卒業程度の学力だけでは十分ではなく、高校進学が必要であるかのような雰囲気がある。しかし、学歴が能力や適性と必ずしも比例するとは限らない。確かに、受験勉強という苦難に耐えてきたという意味では、一定の耐性と汎用的能力があると見なされている。そのため、より難易度が高い上級学校に進学した者の方が評価され、就職の機会に恵まれることになる。人は受験勉強をして、進学の可能性を増大させている。一方で、能力や適性は学校における学力と必ずしも相関があるわけではない。だからこそ「どってことないもん。高校なんか出たって。」という台詞が現実味をおびて聞こえるようになる。ところが、それはすみれの本心ではない。本人としてはそうやって満足するかのようふるまっても世間ではそうはいかない。こうしたことについて、熊沢誠は次のように述べている。「もうひとつには、中学卒業者に対する、本来はないはずの「いわれなき差別」の問題があります。私の大好きな中島みゆきの唄「ファイト!★」はこんな語りで始まります。『私中卒やから仕事ももらわれへんのだよ』と、書いた女の子の手紙の文字、とがりながらふるえている…。中卒者はなぜ多くの企業で雇われないのか？会社の仕事に必要な知識に比べて中学校で教えるカリキュラムのレベルが低いということは、絶対にありません。かりにいま中学校で教えられることを生徒たちがきちんと学んでいれば、会社の仕事のまあ70～80%はちゃんとできるはずですよ。とくに日本では会社が技能を与えるのですから。では、会社が中学卒を敬遠するのはなぜか？こんなにみんなが

高校や大学に行くようになった時代に中学卒で働くような人は、本人か家族かにどこかおかしいところがあるに違いない、経営者はそう考えるのです。」<sup>9)</sup>

現代の日本では、中学卒業程度の学力があれば、相当程度のことを理解できるはずである。例えば、漢字の読み書きで言えば、常用漢字はほぼすべて読み書きできるようになっている。国語事典の調べ方もわかっているの、本や新聞を読んでも読めないことはなく、意味がわからなくても調べることができる。そのため、世界で起こっている情勢を理解することができ、科学的なものの見方・考え方はある程度身につけているはずである。つまり、社会に出て必要とされる常識的な能力は身につけているはずである。さらに、日本の場合、職業に必要な専門的能力は、高等学校以上の学校で身に付けるのではなく、先に見てきたように就職してから企業内で身に付けていく。そうであれば、なおさら学歴は必要ないのではないだろうか。それにも関わらず、中学卒業者が世間的に認められないのは「いわれなき差別」であるというのである。

## 8. 学校で身に付けるべき能力

では、学校がそれほどまでに評価されないならば日本において、学校で身に付けるべき能力、ないしは身に付ける必要がある能力とは一体何なのであろうか。

その能力が、社会に出て社会生活を送る上で必要な能力であるとされ、与えられた仕事を勤勉に遂行しようとする能力、集団の中で調和をとることができる能力といったような汎用的な能力であるとされてきた。この汎用的な能力は、エンプロイアビリティとされている。エンプロイアビリティは、①能力的側面、②行動的側面、③性格的側面、④知識的側面の4つの側面がある。このうち、日本の企業は、学校では主に②と③を身につけることを求めてきた。ところが、近年に至っては、正確に既定の物事を遂行する能力よりも、問題解決的な能力が求められるようになってきた。そのため、学校教育でも「何を教えたのか」よりも「何ができるようになったのか」といった「資質・能力」の育成が求められるようになってきた<sup>10)</sup>。そうした学校において育成すべき「資質・能力」に変化が見え始めた現在にあって、学校だけでは育成することができないのが適性ではないだろうか。職業に対する適性は、実際にその職業に就いて体験してみなければわからない類のものがある。そのため、学校の教育だけでは適正を見出すことは難しい。そこで近年は、学校と企業が連携して「インターンシップ」を実施するようになってきた。「インターンシップ」は就労体験を通して、自己の職業に対する適性を見極めるための体験学習である。こうした学校と職場をつなぐ新しいシステムによって、学校だけでは補うことができない学習を実施して、エンプロイアビリティを高めるための取り組みが行われるようになってきた。学校教育が担う進路選択のための能力付与は、学校だけではなく企業と連携することによって、子どもたちに新たな能力付与を要求するようになってきた。

現代の日本では、すみれのように学校に通うことがで



きなかった存在であっても、「人に後ろ指ささ」れないようにするためには、学校に通いエンプロイアビリティを高める必要があることを寅次郎の台詞は語っている。

## 9. 学校と仕事をつなぐ進路指導

これまでみてきたように、これからは学校と仕事をつなぐ新たな取り組みを含めたエンプロイアビリティの育成が必要とされている。ところが、エンプロイアビリティに含まれない能力である職業意識の形成、職業につくための専門的な能力の育成、働くことへの意欲形成とその社会的な役割の理解、労働者としての権利の理解と働く者の権利を守る法制度の知識・理解といった知の育成に焦点をあてた指導が十分におこなわれているとは言えない。そのことが、現実世界を読み解き、フィクションという物語ではあるものの、人々の共感に訴える映画が本質的な問題に焦点を当てて考える契機をつくってくれるのではないだろうか。本論では、映画「男はつらいよ」に示された台詞を中心にそうした能力の存在を示し、その育成の必要性について考察してきた。

結果、現代の学校における進路指導は、職業に関する教育が社会において働くことの制度や仕組みと関連させて捉えられる必要があることを見出してきた。今後は、その弱点を克服するリアリティのある進路指導の実践に取り組む必要がある。

### 参考文献

- 1) 文部科学省「普通科・職業学科別進学率の推移」(学校基本統計(学校基本調査報告書))より
- 2) 濱口恵俊・金児暁嗣編著『寅さんと日本人 映画「男はつらいよ」の社会心理』:加藤ゆうこ著 第2章「「男はつらいよ」シリーズの構成と特色」p37. 和泉書館(2005)
- 3) 竹原弘『寅さんの社会学』p7. ミネルヴァ書房(1999)

- 4) 『人生に寅さんを『男はつらいよ』名言集』キネマ旬報(2008)、小泉信一『朝日新聞社版 寅さんの伝言』講談社(2013)
- 5) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会「[卒業認定・学位授与の方針](ディプロマポリシー)」「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラムポリシー)「入学受け入れの方針」(アドミッションポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン」(2017.3.31.)
- 6) 文部科学省「基礎的・汎用的能力についての提言の例」中央教育審議会・キャリア教育・職業教育特別部会(第7回)配付資料(2009.5.7)
- 7) 石渡 嶺司『キレイゴトぬきの就活論』新潮新書(2017)
- 8) Encyclopedia of Educational Research Marvin C. Alkin, American Educational Research Association Macmillan, 1992 “VOCATIONAL EDUCATION” pp.1511-1514
- 9) 熊沢誠『働き者たち泣き笑顔』有斐閣 pp.101-102(1993)
- 10) 文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)」(2017.12.21.)

### 引用作品についての注釈。

- 注1. 男はつらいよ第40作「寅次郎サラダ記念日」(1988.12.24.公開)寅次郎が知り合った女医の姪について大学に出かけるなど、大学が扱われる作品。寅次郎の甥である満夫に進学相談を受ける。満夫は自由に生きる叔父・寅次郎にあこがれを抱いている。
- 注2. 男はつらいよ第26作「寅次郎かもめ歌」(1980.12.27公開)  
寅次郎とともに江差から東京に出てきて、定時制高校を受験、学び直しをする少女・すみれを中心に学校で学ぶことを描いた作品。受験の様子、授業の様子などから定時制高校の様子がわかる。最後に寅次郎が定時制高校に願書を出す、寅次郎は中学校中退のため受理されなかった。